

## 読書行為論研究

——イーザー (Iser, Wolfgang) の読書行為論の理論的検討——

上 谷 順三郎

### はじめに

イーザー (Iser, Wolfgang) の『行為としての読書』(轡田収訳 1982. 3 岩波書店)<sup>1)</sup>の出版以来、わが国の文学教育では「読者論」の導入が叫ばれている。多くの研究者がこれと取り組み様々な提唱や方法(論)の提案を行なっているが、そこにはある行きづまりが感じられる。<sup>2)</sup>筆者はその原因を「読者論」の理論的位置づけの曖昧さに見る。すなわち、ある理論を導入する際にはその理論を当該領域において新たに位置づける必要があるのに、その点での徹底に欠けていると思われるのである。ここでいう理論的位置づけとはその理論の性格づけや取り扱い方の決定を意味するのであるが、「読者論」を文学教育上にどのように位置づけるか、「読者論」に対してどのような理論的位置づけを施すか、これらの問題を解決しないうちは、読者論導入による文学教育はその真価を発揮することはないだろう。そこで本稿では「読者論」を「読書行為論」として措定し(その理由は次章で述べる)、「読書行為論」を文学教育上に、特にその読みの授業にどのように位置づけるか(理論的位置づけ)を考察し、併せてイーザーの「読書行為論」の理論的検討を試みる。

### 1. イーザーの読書行為論の理論的位置づけ

本稿では「読者論」を「読書行為論」として措定するが、まずはその理由を明らかにしておこう。文学教育においてその導入が求められている「読者論」は、おそらく外山滋比古の『修辞的残像』(垂水書房 1961. 3. 15)や『近代読者論』(垂水書房 1964. 3. 30)及び前田愛の『近代読者の成立』(有精堂 1973. 11. 20)にその呼称の起源があるのだろう。しかし「読者論」とはいってもその定義は一概にはできない。なぜなら今話題になっている「読者論」は外山や前田のそれではない。また一般に「読者論」といわれるものにも大きく二つの流れ——「読者反応批評」と「受容美学」<sup>3)</sup>——があって、単に「読者論」と言っただけではその実体をつかむことはできないのである。

それでまずここでの「読者論」の正体をはっきりさせておこう。先に触れたように、わが国の文学教育で「読者論」導入が叫ばれ出したのは、イーザーの『行為としての読書』の出版以来のことである。また「読者論」に言及している人は、必ずと言っていいほどイーザーの言を引いている。従ってここでの「読者論」は「イーザーの読者論」であると言っていいだろう。しかし、「イーザーの読者論」はその書名が示すように「読書(の)行為」に焦点を当てたものであり、読書過程の分析に基づいた読書行為の究明を目指したものである。その趣旨に沿って「読書行為

論」と呼ぶほうがふさわしいであろう。<sup>4)</sup>また「読者論」という漠然としたとらえ方からは「読者中心の考え方」といった大雑把な意義しか引き出し得ない。そこでは「読みの授業に取り組む態度」としての「読者論」導入に止まってしまう可能性が強くなる。<sup>5)</sup>こういった意味の「読者論」であれば従来の先達の研究にも認められるし、今さら「読者論」導入を唱える必要はない。故に「イーザーの読者論」の主眼点に着目し、現在「読者論」を導入する意義を考慮に入れるならば、文学教育においては「読書行為論」として指定することが望ましいと考えるのである。

ところでイーザーの読書行為論は文学教育にとってどのような意義を持つのだろうか。それについては、「文学教育における＜読み＞において、読者である学習者の読みを尊重し、授業においては学習者を読みの主体者として位置づけること」の必要性を再認識させてくれたことや「学習者と教材を別個のものとして扱う二元論的発想の克服」の視点を提供してくれたことなどが挙げられている。<sup>6)</sup>しかし基本的には、イーザーの読書行為論では読むこと自体に焦点を当てて読書過程を分析している点に加えて読書の現代的意義を説いていることが重要であろう。<sup>7)</sup>従って読書行為論は、読書の目的すなわち「なぜ読むのか」や読書の方法すなわち「どのように読むのか」といった問いに答えてくれるはずのものであろう。つまり読書行為論は読書の意義を読書過程の研究によって裏付けているわけで、これによって読みの授業の目標とそれに至る過程を設定する可能性をも開いてくれるだろう。従来は読書の意義を読むことの教育の目標としていたが、そこでは学習の動機づけが設定できず、従って目標に至る過程やその結果を吟味したり評価したりする方法が立てられなかったのではなかろうか。すなわち読書の目標を、例えば文学的認識力を育てることにおいても、この目標に対して学習者をどのように動機づけるか、またこの目標に至る過程をどのような方法で吟味したり評価したりするか、といったことに対しては不問に付する以外になかったと思われる。言い換えると読むことの教育の目標は学習の動機づけとはなっておらず、目標とそれに至る過程（目的と手段）が実質上分離されていたと考えられるのである。

しかし読書行為論に則るならば、まず読書の意義（目的）が設定される。そして読みの授業の目標としては、読書の意義（目的）に適うための読書行為（読みの方法）を学ぶことが挙げられる。この読書行為（読みの方法）こそ読書行為論から抽出されるべき理論である。従ってこの理論の各要素（読みの諸方法、読書行為の諸能力）の獲得が読みの授業の目標となる。この目標を達成することが学習の動機づけとなり、生徒に対しては目標達成の過程において読書行為能力に応じた評価が下されることになる。そしてここに、目標とそれに至る過程（目的と手段）が統合された学習及び教授の成立を見ることができよう。

以上のように読みの授業において読書行為論を理論的に位置づけると、読みの理論を学習するための方法は、読書過程中的効果に基づき一般的な手順として呈示される。この手順が読みの授業における教師の指針となり、教師は自分の受け持ちの授業で、子供の実態に即してあるいは教育的配慮に基づいて自分なりに実践する。この実践は、絶えず方法（手順）にフィードバックされるべきものであり、方法をコントロール（制御）して修正・変更を施していくものとして設定できる。これは、読みの理論に基づいた方法と実践とをシステムのメカニズム（フィードバック

とコントロール)として捉え直そうとするものである。<sup>8)</sup>

## 2. イーザーの読書行為論の理論的検討

本章ではイーザーの読書行為論を読み授けの授業における読みの理論として設定するにあたり、その有効性を検討する。まず読書行為論の文芸批評における位置を確認し、次にその概要を眺め、理論としての有効性を検討する。

### 2.1 イーザーの読書行為論の文芸批評における位置づけ

近年文学研究者の間では、文学の確定性をめぐっての議論が戦わされている。文学作品が、読者によって認識的に捉えられる確定的な実体を備えているか、それとも作品は、読者の読書の営みの中で構築されていくものかという問題である。前者によれば、作品は万人が共通に認識できる確定的な構造と意味を備えていることになり、また後者によれば、作品は、読者に会うまでは確定的な実体として存在せず、また読者に会って後も、読者によって常に解釈が加えられて変貌を遂げる流動的な存在であるということになる。<sup>9)</sup>

前者の、文学を確定性を有する認識的な実体と見る立場は大きく三つに分かれる。一つは、確定性を作品に求める立場で、新批評(ニュー・クリティシズム)がその代表的なものである。この立場では、作品の中で言語的に表現されたもののの中に文学の実体を見出し得ると主張する(作品中心主義)。二つ目は、作者の意図に文学の確定性を求める立場で、作品解釈の唯一の基準は作者の意図した意味であると主張する(作者中心主義)。三つ目は、文学の確定性を文学を包含する広い文化的な文脈に求める立場で、文学作品は、作者の属する文化自体の原型的パターンの表現、あるいは、その文化の中で成立した諸構造の具体化であると主張する〔構造主義、神話(原型)批評〕。<sup>10)</sup>

次に後者の立場では、人間の主体的な意識を重視し、文学を確固として現前する実体として分析し記述することよりも、文学がどのように理解され、作品の意味がどのように解釈されるかということ、つまり読者の文学受容(もしくは読者の側からの文学構築)の在り方を探ることに研究の重点が置かれるようになったのである。<sup>11)</sup>人文科学の基礎的方法論としての解釈学を提唱したディルタイ(Dilthey, Wilhelm)から、人間の実存の形態としての理解と解釈を考究したハイデッガー(Heidegger, Martin)、そして理解の存在論としての解釈学を展開しているガダマー(Gadamer, Hans-Georg)を経た解釈学を基盤として、<sup>12)</sup>この立場からは読者論や読書論が提唱され読者による意味の創造、あるいは読者における意味の成立が強調されている。しかし、不特定多数の読者によって無限に行われる読書から、作品解釈が多元主義に陥らないためには、読書の構造についての普遍的な原理が必要になってくる。<sup>13)</sup>

この必要性に鑑みて、意味の問題を人間の意識の問題としてアプローチするのが現象学的な文芸批評である。この種の文芸批評では、読書を、文学作品が潜在的に準備している美学的な価値を統合し、それを時間的-空間的次元で美学的客観として実体化していく営みであると捉える。従って、読書過程においては文学作品の意味が美学的客観として成立していくと考える。これは

人間の意識作用の論理性によって、文学における意味の間主観性を保証しようとするものである<sup>14)</sup>と言える。

イーザーは、この現象学的な文芸批評の立場に属する。そしてまたイーザーは、受容美学という西ドイツのコンスタンツ学派によって提唱された、広い意味での読者論の一派の中核的存在である。この受容美学は、イーザーと同じコンスタンツ大学の教授であるヤウス（Jauss, Hans-Robert）に端を発する。しかしヤウスがテキスト受容の条件となる読者の思考態度ないしは反応を伝える証言を研究対象とし、歴史的・社会的な方法をとるのに対して、イーザーは、テキストの行なう受容の予示が持つ潜在的な作用力がテキスト加工を引き起こし、ある程度まで加工を左右している点に目を留め、テキスト理論的な方法（イーザーは作用美学と命名）をとる。

以上見てきたように、イーザーの読書行為論は、文学という一連の営みにおける読者の役割の復権を唱えると同時に、読書の現象学的分析によって、読書行為の内実をも開示しようとするものである。

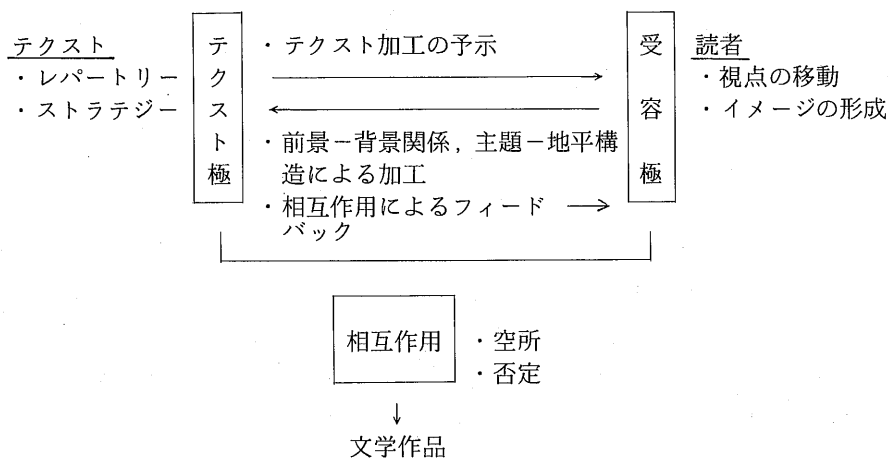
## 2.2 イーザーの読書行為論の概要

イーザーの理論的集大成の著書『行為としての読書』に拠りながら、以下イーザーの読書行為論を概観してみよう。

作用美学（受容美学におけるテキスト理論的な方法）に基づく文学解釈が関わるものとして、イーザーは次の三点を挙げている。

1. テキストがコンテキストの中で示すところの機能（Funktion）
2. 読者にとっては馴染みのないことであるにもかかわらずそれを理解することは可能な経験をテキストを通して媒介するところのコミュニケーション（Kommunikation）
3. テキストの〈受容の予示〉やそれによって読者が求められる資格（Vermögen）と能力（Kompetenzen）を明らかにするところのテキスト加工（Textverarbeitung）<sup>15)</sup>

以下イーザーの読書行為論を順を追って見ていくが、それを図示すると次のようになるだろう。



イザーは、読書過程の分析を、テキスト極を中心とする機能史<sup>16)</sup>から見た文学のテキストモデル、受容極つまり読者の理解行為の進行を追う読書の現象学を経て、テキストの具体化をテキストと読者の相互作用としてまとめている。

まずテキストと読者の伝達関係を捉えるモデル（機能論的テキストモデル）によって、イザーは、読書行為の成立条件として、(1)レパートリー（Repertoire）、(2)ストラテジー（Strategie）(3)現実化（Realisation）の三つを指定する。これはオースティン（Austin, J. L.）の行為遂行的発言成立のための三条件、(1)話者と聞き手に共通な慣習、(2)両者が承認している手続き、(3)発話行為に参加する心構え、に倣ったもので、レパートリー（貯蔵）とは場面形成のために必要なく慣習<のことであり、ストラテジー（計略）とは<承認された手続き>のことであり、そして現実化<実現>は読者の<参加>のことである。<sup>17)</sup>以下これら三つの条件について説明しておこう。

#### (1)レパートリー

これは、文学的コミュニケーションが成立するための条件または成立する場面を用意するもので、その要素としては、一定の構造に基づく現実モデルとしての社会的意味システム（社会的歴史的規範）と過去の文学形式がある。前者は、虚構テキストが準拠している様々なシステムのことであり、それは偶発性とか複合性を予め排除してそれぞれ固有な立場から世界を意味構成しているものである。後者は、過去の文学の伝統全体と言い換えても良い。テキストがその必要性に応じて取り込む歴史的状況は、その全てを網羅して明記し得るものではないし、読者にとってもその全てが理解されるわけでもない。そこで、テキストが対処している問題について、なぜその要素を選択したのかを読者が知る契機が必要となる。この契機となるのが過去の文学の引用である。これには文学形式（ジャンル）、引用、パロディ等の引用がある。

このレパートリーはいわば文学的コミュニケーションの外的な絆であり、テキストと読者の間の伝達のための素材として捉えられる。

#### (2)ストラテジー

これはレパートリーの各要素を結び付け、それを秩序立て、受容条件を整えるものである。つまりテキストと読者が共有するコミュニケーションの手続きのことで、テキスト内でレパートリーが構成される手続き（レパートリーの各要素を主題－地平構造で組み立てる）であると同時に読書の手続き（レパートリーと読者の準拠枠との結び付きを前景－背景関係から読み取る）でもある。ここでの主題－地平構造とは選択された要素をテキストの理解ができるように組み立てることであり、これは読者の視線を調整すると同時に、テキストを遠近法（イザーは語り手、登場人物、筋、虚構の読者：読者の想像に委ねられる部分、の四つを挙げている）の組合せとして構成して行くものである。つまりテキストの内部関係（脈絡）に関わるものであると言える。また前景－背景関係とはテキストの外部関係（外枠）に関わるものである。レパートリー内の選択された要素が前景となり、その本来の準拠枠つまりコンテキストが背景となる。この関係によってテキストの世界が理解可能なものとなるのである。（この前景－背景関係は主題－地平構造によって具体化される。）

つまりストラテジーとは意味形成の内的組織網であり、従来の文学理論でいう手法に当たるものと言えるだろう。

### (3)現実化（または具体化：Konkretisation）

これは、読者の参加によってテキストが現実化（具体化）されるということである。つまりリーダーにとって「文学作品とは、読者の意識においてテキストが構成された状態を指す<sup>18)</sup>」ものであり、テキストと読者の相互作用によって初めて顕在化されるものであると考えられているのである。

次にテキストの現実化に参与する読者の理解行為としては、(1)視点の移動と(2)イメージの形成が挙げられる。

#### (1)視点の移動

これはレパートリーの要素間に働くストラテジーに対応するもので、テキスト理解のために遠近法を結合するものである。遠近法には語り手（語り手の注釈あるいは地の文と呼ばれる部分の叙述）、登場人物（主人公と脇役の会話）、筋（筋の展開）、虚構の読者（読者に委ねられた位置）の四つがある<sup>19)</sup>。それぞれの遠近法が志向対象の一つの見方を示す（例えば会話についての語り手の注釈）。このようにしていくつかの遠近法が相互観察の視点をとって、いろいろな角度から光が当てられ、組み合わせあって作り出される見方が、テキストの世界像と考えられる。

それはどのような過程で行われるのか。読者はテキストを読む間、次々に現われては消える様々な遠近法の断片（セグメント）を渡り歩くことになるのであるが、それらの遠近法は異なる基盤に立つものであるから、そのままでは拡散してしまう。それらを結び合わせ、テキストに向けられる読者の視線を調整するのは、主題－地平構造である。読者がその瞬間に目を向けているのがその時の主題であり、その際、先程まで向かいあっていた他のセグメントが地平となる。このように、読書の時間の流れの中でテキストの遠近法が交替するにつれて、読者は視点を変えさせられ、同時に個々の遠近法のセグメントが主題になったり地平になったりする。そこで読者は、地平になったセグメントから主題を見て何らかの形で結び付けようとする。

このようにして、主題－地平構造は、読者の視線を調整すると同時にテキストを遠近法の組合せとして構成していく。これはストラテジーの基本的な結合ルールであって、この構造によって読書の経過にともなって読者の位置、視点は定まり、恣意性の介入を防ぐのである。

#### (2)イメージの形成<sup>20)</sup>

文学テキストは線条性という枠組みのため、レパートリーの要素は時間的な前後関係で配列される。従ってそれぞれのイメージは先行するイメージを背景にして現われ、次のイメージが現われるとそれは過去に送りこまれ、それ自身が背景になる（前景－背景関係）。こうした時間的な継起のために、読者は何らかの関係（例えば因果関係）によってそれらを結び付けようとする。故に、一つのイメージの意味作用（関係概念）は、背景になっているイメージとの関わりで初めて理解されるのである。しかしその際前後関係だけでは不十分であり、テキスト全体の中での位置を考える必要がある。読者は最終的な判断を一時保留しながら、線条的に配列されたイメージ

を結び付け、読書を通して一貫性を持たせる努力を続ける。

ところで、テキストの個々の文が示す意味方向は、常に来るべきものへの期待を含んでいる。一つの文を前にした時の読者は、心の中で次に続くはずのものを期待し求める。期待が成就するか否かにかかわらず、読者の期待とテキストの進度との相互作用によって、テキストは作品として具体化する。つまりテキストが読者の意識に転移するのである。ここでの期待は「予覚」と呼ばれる。そしてさらに読者の意識は先行イメージへも向かい、意味作用を確認しようとする。この過去志向を「保有」と呼ぶ。結局テキストは読者の意識に捉えられ、保有と予覚との構造に分かれ、読者の意識に期待と記憶が交互に投影されることになる。その過程で読者の関心の中心の対象である相関体（Korrelat：相関関係にあるもの）が軸になり、予め生み出されていた期待に修正を加えた記憶が新たな変化を起こしたりして相互に作用し合うのである。最後にイーザーは、読書というテキストに導かれる行為を通じて、読者によるテキストの加工が、加工を行なう読者にフィードバック効果を及ぼすことを、テキストと読者の相互作用としてまとめている。この相互作用の成立条件としては、(1)空所と(2)否定が挙げられている。

(1)空所（Leerstelle）<sup>21)</sup>

テキストの不確定性から生ずる空所は、読者の意識へのテキストの転移に重要な働きをする。テキストの一つの遠近法のセグメントは、次のセグメントとイメージや視点が接近していたり連続しているとは限らない。むしろその間に隙間があるのが普通である。この隙間は、テキスト構造から見て、「内包された読者」（der implizite Leser）<sup>22)</sup>が位置すべき場所である。それは読者が充たすべき空所であり、そのために読者は想像力を働かせながら読書行為に参加することになる。もし空所の少ない連続的な図式のテキストであれば、そこからは貧弱な印象しか得られない。そこでは読者は全く受動的なものになってしまう。

空所は、円滑な連続を妨げることによって前後の遠近法に不調和をもたらし、新しいイメージ形成を妨げるが、同時に読者に刺激を与えることにもなる。読者が妨害を超えてそれを結び付けようとする、却って鮮明なイメージが結ばれたりする。つまり、空所のあるセグメント同志を結び付けようすると緊張が生じ、その緊張を解決すべく、読者は二つのセグメントに類縁性が相違を確認しようと計るのである。

空所は、はじめはセグメント間の結合を保留し、その相互の投影を行なわせるが、次の段階では、こうした形で結び付けられたセグメントの相互作用の場として読者が一定の結合関係を作り出すための条件を整える働きをする。そしてこれは空所の最も重要な働きであるが、空所の枠組みの中でセグメント同志を結合させるにしても、二つのセグメントが同時に捉えられることはない。読者は二つの間を往復してまとめようとする。その動きで目に止まったものがその時の主題になる。ある瞬間の主題は、次のセグメントが潜在化する地平が変わる。それが繰り返され、シーソーのように主題と地平が入れ代わることによってセグメント相互の関係が明らかになり、それぞれのセグメントをテキストの美的対象を構成する要素に変位させる。

(2)否定（Negation）

(1)で挙げた空所は、読書のシンタグラム軸（統合軸）を組み立てるものと言える。そこでは、遠近法のセグメントを主題－地平関係に置くことによってセグメント間の結合の必要性を示していた。しかし空所にはもうひとつの機能があって、それは読書のパラディグマ軸（連合軸）に関わるものである。これは内容の面でセグメント相互の結合を制約し、読者の想像によって生み出されるべき意味形態（Sinngestalt）に対して選択的な作用をするというものである。そしてこのことによって、否定された規範と読者のテキストに対する態度との関係を問いかけるのであるが、これが否定である。

空所は読者の想像力に働きかけて、テキストが与えるかあるいは読者に喚起させた知識を再生に導くのであるが、新たな意味は、否定によって主題化された空所を確定するところから得られるのである。つまり空所と否定は、テキストのシンタグラム軸とパラディグマ軸に、結合の中断ないしは潜在的な主題があることを示唆している。そしてまたテキストの言語表現は、省略という空所の作用と無効化という否定の作用から見られるように、表現されていないものによって裏打ちされていることがわかるのである。

イーザーはまた、以上のように空所と否定によってテキストが作用し、文学的な伝達を遂行するに至る条件の重要性を否定性（Negativität）と呼んでいる。

### 2.3 文学教育におけるイーザーの読書行為論の有効性

前節ではイーザーの読書行為論の概要を眺めたが、文芸批評におけるこの理論の特異性についても一度考えてみよう。

読むことを解釈との関わりで考える時、そこでは何を解釈するのかという問いを避けることはできない。そしてこの問いに対しては、解釈者と解釈されるもの、主体と客体、行為者と彼が行為する対象あるいは彼に対して行為するものといった二元論が要請されてくる。イーザーの読書行為論は、読者の創造的な介入行為を正統に評価しつつ、ある特定の反応を要求・強制する確定的なテキストをも保持することを目指す点で二元論的である。しかしカラー（Culler, Jonathan）によると、イーザーにあっては、テキストと読者、事実と解釈、確定的と非確定的といった区別は維持されず、彼の理論は結局、読むことを作者の意図の実現化に帰したりあるいは読者の役割を絶対化するという一元論に化してしまうという。<sup>23)</sup>そしてまた「イーザーの錯誤は、読むことの物語を語るのに欠かせない二元論を、理論的にも正しいものと考えたところにあった」<sup>24)</sup>とも言う。つまり事実と解釈、あるいはテキストの役割と読者の役割とはその都度変化する、という読むことの持つ基本的に分裂した性質は、イーザーのような折衷的な定式化の試みでは捉えきれないと言うのである。

しかしこのような批判はあるにせよ、イーザーの読書行為論の意義と価値は決して過小評価されるべきではないだろう。ホルブ（Holub, Robert C.）は次のような評価を下している。

イーザーの業績は、もし我々が文学とは何に関するものなのかを理解しなければならないとすれば、我々は、自らとテキストとの関わりを看過して済ますわけにはいかないという認識を新たにさせた点にある。さらに我々は、テキストは読まれるべきものとして構築さ



れているということ、テキストはそれ自体の読みの可能性の条件を指示するということ、そして、それらの条件は教義的な構造よりはむしろ構成概念を可能にするものであるということ<sup>25)</sup>を、もはや無視し得なくなっている。

また読むことをめぐる言説には、ニュー・クリティシズム以後、イーザーをも含んだ広範囲にわたる読者論の台頭が見られ、一方最近ではディコンストラクション（解体批評）の登場によって、それら読者論自体を疑問視する傾向もある。そしてそれも研究者の数だけ言説が飛び交っているのが現状である。こういった文芸批評の状況の中にあって、文学教育における読むこと（文学の受容）はその理論的根拠をどこに求めればいいのかという問題は簡単には解決できないだろうが、その中にあってもイーザーの読書行為論は現在のところ最も有用なものであると考えていだろう。以下その有効性をいくつか取り上げてみよう。

第一点は、前にも触れたように、文学の受容についてテキストと読者との関わりを分析する必要性を説いたこと、そしてそのテキストは予め読まれるべきものとして構築されており読みの可能性の条件を指示しているということである。この点は、文学教育で読むことを考える際の出発点として捉えることができる。

第二点は、読書の理解行為においては、読者の気質や体験の独自性のために具体化される作品は異なるけれども、その理解は決して恣意的なものにはならないということである。なぜなら、テキストのストラテジーのもとでは、主題から地平へと変わって行く遠近法がテキストを読み進むことによって増大するに連れて、読者の位置・視点を決めてしまうからである。そうするとイーザーの論に従うならば、文学教育においては、児童・生徒の個性的な読みを尊重しながらもそれらの読みが恣意的なものに墮する危険性は回避できるのではないかということが期待できる。そしてこの点は、文学教育における個人の読みと集団の読みとの関わりあいについても有効な視点を与えてくれる。

第三点是否定性に関わるものである。これは、特に現代小説において読者とテキストとの相互作用の条件となるものであるが、イーザーはこの概念を教育的な目的に適う道具とみる。例えばそれは、「…虚構テキストでは、異質のレパートリー要素を同一地平で組合せることによって、まさに既知の規範の有効性を疑問視する。」<sup>26)</sup>という言葉などに表れている。すなわち難解と言われる現代小説においても、適切な読みを行いさえすれば、我々は然るべき教訓を得ることができると言うのである。この点は、文学教育での現代小説の取り扱いに示唆を与えてくれる。

しかし、イーザーの読書行為論には欠点もある。それは上述の第三点から導かれてくる。つまり、教訓的な読みを行ない得る読者がイーザーにあっては想定されているわけで、イーザーの読書行為論から我々が見出す読者の姿は「教育あるヨーロッパ人の理想」<sup>27)</sup>なのである。従って現実の読者との間にはずれが生じることになる。すなわち「読書体験を読みの戦略に吸収同化しようとする」ため、そこでは「基準（イーザーの理想とする読者－引用者注）からのずれ、隔たりは…排除されて背後へと退くことになる」<sup>28)</sup>わけである。この点が読書行為論の限界であり、また文学教育の独自性発揮の場となるのではなかろうか。なぜなら、現実の読者までは覆い得ないイー

ザーの読書行為論の弱点を、現実の読者（児童・生徒）を対象とすることで補い、文学教育に合った独自の読書行為論を構築していくことが可能となるのではないかと考えられるからである。

〔注〕

1) 『行為としての読書』のドイツ語版と著者自身の訳による英語版は以下の通りである。

“Der Akt des Lesens”, Wilhelm Fink Verlag, 1976

“The Act of Reading”, Routledge Paul, 1978

2) イーザーの「読者論」（本稿で言うところの読書行為論）を取り上げて意義づけたり、その援用を試みていると目される四氏——関口安義、田近洵一、深川明子、鈴木信義——の場合、大方は自説の文学教育論の補強のために「読者論」を取り上げている。そして文学教育の態度論（読者論を導入することで、文学教育に対してどのような態度で臨むべきかを論じるもの）としての「読者論」導入にはほぼ共通の見解が認められる。すなわち、授業においては学習者を読みの主体者として位置づけること、そしてその際読むという行為の過程（読書過程）をこそ重視すべきで、教師は学習者の多様な読みを包摂できるような教材研究や指導の方法を試みなければならないこと、また教材と学習者の相互作用としての「読み」に基づく授業は、これまでの二元論を克服するものとなることなどである。しかし「読者論」を方法論へ転化する段になって問題が生じてきている。それは、従来の読みの授業の方法と比べて特別な差異が認められないという点である。つまり、「読者論」の意義は認めるがそれに基づいた具体的な方法が呈示できない。あるいは呈示されたものをみてもそこに新しさが見出せない、ならば一体この「読者論」をどのように扱えばいいのか、といった疑問が出されているのが現状なのである。これについては、「教育科学国語教育」（明治図書）のNo. 352（1985. 9）の特集「読者論導入による授業の改革」、No. 358（1986. 1）「文学教材をなぜ国語科授業で扱うか」の「読者論的読みの授業」を参照されたい。なお上述の四氏のうち、深川氏はイーザーの「読者論」の文学教育的翻案を試みている点で注目値する。また田近氏は「読者論」から「読書行為論」への展開を図っている点で特記されるべきである。これら文学教育への読者論導入の現状については稿を改めて検討を加えたいと思う。以下参照した文献を挙げておく。

関口安義：『国語教育と読者論』（明治図書 1986. 2）

田近洵一：連載講座「読み手を育てる」（「教育科学国語教育」明治図書 1983. 4-1984. 3）

深川明子：「読みの授業再考－読者論の視点から－」（金沢大学・語学文学研究13 1984. 3）

「読者間の共通理解・認識を成立させる読みの構造」「子供が創る読み－『注文の多い料理店』の場合－」（金沢大学教育学部紀要・教育科学編第34号 1985. 2）

「読者論からみた文学教材の構造と機能」（「日本文学」7, Vol. 35, 日本文学協会編集・刊行, 1986）

鈴木信義：「読者論から見た文学教材の扱いと学生の意識－小学二年『かわいそうなぞう』

を中心にー」(北海道教育大学紀要・第1部C・教育科学編第34巻第1号)

- 3) 「読者反応批評」とは“Reader-Response Criticism”(ed. Jane P. Tompkins, The John Hopkins University Press, 1980)の訳であり、ホランド(Holland, Norman N.)のいう「相互関係の批評」、カラー(Culler, Jonathan)の構造主義的詩学、フィッシュ(Fish, Stanley E.)のいわゆる感情の文体論といった多岐にわたる体系のいくつかを調和させる包括的な用語でしかない。(『「空白」を読む』R.C.ホルブ著、鈴木聡訳、勁草書房、1986.6.20, p.3)「受容美学」については本稿の「2.1 イーザーの読書行為論の文芸批評における位置づけ」を参照。
- 4) 『行為としての読書』の訳者である轡田収氏もそのあとがきの中で「読書行為論」と呼んでいる。(p. 409)
- 5) 例えば田近氏の次のような発言は傾聴に値する。「特に読みの指導においては、読者論をもって結果としての作品の読み、あるいは過程としての読みのあり方を規定することは誤りである。読者である子供がどう読んだかという点にのみこだわっていたのでは、作品構造に見合った読みを生み出すことはできないからだ。読者の読みを動かぬ前提条件とする安易な読者論は、生成・変容する読みをとらえ切れないのである。言いかえると、安易な読者論は、読みを固定化する危険性をともなうと言えよう。」(前掲論文「読み手を育てる」第3回 p. 118)
- 6) 注2)を参照。
- 7) この点についてイーザーは次のように述べている。「読書行為の研究は、自己観察を経て自己解明に至ることを目的としている。このように自己に対する意識を高めていかなければ、文学との出会いによって獲得し、また自己の行動が自動化し規格化する傾向の歯止めとなる批判能力を、読者が内在化することはできない。」(『行為としての読書』日本語版への序文XⅢ)
- 8) システム論については沢田允茂の以下の著書を参考にした。  
『論理と思想構造』(講談社学術文庫, S. 52.3.10)  
『知識の構造』(日本放送出版, S. 44.12.10)  
『ライフサイエンスの哲学』(講談社学術文庫, S. 51.12.10)
- 9) ここでは米須興文著『ミメシスとエクスタシス』(勁草書房, 1984.10.15)の「はじめに」に拠ってまとめた。
- 10) 同書p. 62
- 11) 同書pp. 61 f.
- 12) 同書p. 101
- 13) 同書, 第4章Ⅰ「不確定性の解釈学」
- 14) 同書, 第4章Ⅱ「読書の現象学」
- 15) 『行為としての読書』日本語版への序文ⅩⅡ。ただし“Der Akt des Lesens”(Zweite, durch-

gesehene und verbesserte Auflage 1984, UTB 636) の第2版への序文Ⅶに基づいて一部を修正した。

- 16) 『行為としての読書』の「訳者あとがき」によると、「文学は歴史的に異なった社会機能を持ち、同時に文学表現そのものにも、ジャンル、形式、技法等の諸構造に機能変化があるところから、これらを包括する概念として『機能史』が選ばれた」(p. 413) という。
- 17) 『行為としての読書』pp. 115 f.
- 18) 同書 p. 34
- 19) 同書 p. 168
- 20) イーザーはイメージについて次のように述べている。「…イメージは、経験的对象とも、表現された対象の意味とも異なるなにかを生み出す。それは感覚的経験を超えてはいるが、述語的に概念化されたものではない。」(『行為としての読書』p. 236)
- 21) 今村仁司によるとテキストに内在する空白 (blank の訳語) には三種類あるという。それは 1. 経験的事実としての空白, 2. テキスト生産者が意図的につくりだす空白, 3. テキストの充実した世界が必然的にうみだす空白, であるが、ここでの「空所」(空白) は 2. の場合である。(「現代詩手帖」思潮社 1983.11 「テキストと空白」)
- 22) テキストには読者の反応を導く構造のネットワークがあり、それによって読者のテキスト理解が促進されるという力学的な過程を総称するもの。(『行為としての読書』p. 59)
- 23) 『ディコンストラクションⅠ』(富山太桂夫, 折島正司訳, 岩波選書, 1985. 1. 23) pp. 115 f.
- 24) 同書 p. 116
- 25) 前掲書『「空白」を読む』p. 165。ただし“Reception Theory”(New York and London: Methuen, 1984)p. 106に基づいて一部を修正した。
- 26) 『行為としての読書』p. 151
- 27) 前掲書『「空白」を読む』p. 151
- 28) 室井尚著『文学理論のポリテイク』(勁草書房 1985. 6. 25)p. 60